

論文

村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』¹⁾ 論

一月に帰る E. T.・海に沈むマセラティ

小島基洋

要旨

『ダンス・ダンス・ダンス』の作品世界を、2台の自動車—マセラティとスバル—に着目して読み解く。

主人公の親友・五反田はマセラティを所有している。マセラティは海神ネプチューンの槍をエンブレムにもつ高級外車だ。マセラティに乗った五反田は、そのエンブレムに導かれるように、海に突っ込み自死をとげる。

一方、主人公〈僕〉の愛車はスバルだ。星をあしらったスバルのエンブレムは、〈僕〉と宇宙空間の親和性を暗示する。〈僕〉は、かつての恋人に「月に帰りなさい」とふられ、13歳の少女ユキに「あなたが E. T. みたいだったらよかったのに」と残念がられる。

この作品の基底には、海に引き寄せられる五反田と、宇宙に引き寄せられる〈僕〉のコントラストがあるのだ。

ちなみに、マセラティ創業の地・ボローニャには、「ネプチューンの泉」と呼ばれる観光名所がある。マセラティのエンブレムは、この噴水に立つネプチューン像の槍に由来しているという。執筆当時の村上がボローニャを頻繁に訪れているのは果たして偶然だろうか。

キーワード：村上春樹、『ダンス・ダンス・ダンス』、E. T.、マセラティ、ネプチューン

ネプチューンの泉

「ある日突然、僕はどうしても長い旅に出たくなったのだ」（『遠い太鼓』16）²⁾

40歳を目の前にしていた村上春樹は、3年に渡る海外生活を始めた。当時の暮らしぶりはエッセイ集『遠い太鼓』から窺い知ることができる。ギリシャで書き始めた『ノルウェイの森』をローマで完成させた彼は、その地で、次作『ダンス・ダンス・ダンス』の執筆を続ける。「だからこのふたつの小説は一僕にとってはということだが—宿命的に異国の影がしみついている」（『遠い太鼓』17）—村上はそう述懐する。

「異国の影」—それが本稿の出発点である。鍵となるのは、美食と芸術の町・ボローニャ。村上がローマ滞在中に何度も訪れた町だ。

おいしいニョッキが食べたくなくて、汽車に乗ってはるばるボローニャまで行く。僕はボローニャという町がなんとなく好きで、とくにこれといった用がなくてもふらっとここに行つて、三、四日ゆっくりすることがある。この町には観光名所というのがほとんどないから、あまり観光客も来ない。町の規模も手ごろでぶらぶら散歩するにもいい。（『遠い太鼓』318）

村上がボローニャに「観光名所というのがほとんどない」と語る。しかし、三千年の歴史をもつこの町には、ヨーロッパ最古のボローニャ大学をはじめ、サン・ペトロニオ聖堂、アシネッリの塔といった歴史的建築物が数多くある。その中で注目したいのは、観光の中心地マッジョーレ広場に隣接する「ネプチューンの泉」（図1）³⁾だ。



図1

噴水の中央にそびえ立つネプチューン像。ローマ神話におけるネプチューンは、ギリシャ神話のポセイドンに由来する水を司る神だ。噴水の下部にはセイレーンの姿が見える。彼女たちが跨っているのは、海神ネプチューンの足下にふさわしく、ある海洋生物である（図2）。



図2

写真で頭部が確認できるだろうか。セイレーンを乗せているのは——ポセイドンが妻を喜ばすために創造した生き物——イルカだ。

『ダンス・ダンス・ダンス』の最初のページを開いてみよう。

よくいるかホテルの夢を見る。

夢の中で僕はそこに含まれている。つまり、ある種の継続的状况として僕はそこに含まれている。夢は明らかにそういう継続性を提示している。夢の中ではいるかホテルの形は歪められている。とても細長いのだ。あまりに細長いので、それはホテルと言うよりは屋根のついた長い橋みたいに見える。 (『ダンス』上・5)

「いるかホテル」とは、シリーズ前作『羊をめぐる冒険』で、主人公が恋人と宿泊した札幌のドルフィンホテルのことだ。『ダンス・ダンス・ダンス』の冒頭部分が村上の脳裏に浮かんだのは、「ネプチューンの泉」でイルカ像を目にした瞬間だったのではないか……などという推論を得意げに披露する気はない。

しかし、ネプチューンが『ダンス・ダンス・ダンス』の主要なモチーフとなっていることは間違いない。もう一度、噴水の上部、ネプチューン像に目を移そう。注目するポイントは

右手に握られた槍である。イタリア、そして三叉の槍……といえば、自動車愛好家は、ある高級ブランドを思い起こすだろう。マセラティだ。1919年にここボローニャで自動車会社を創業したアルフィエリ・マセラティは、「ネプチューンの泉」に因み、三叉の槍をそのエンブレムにした（図3）。

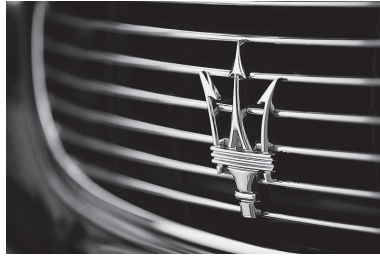


図3

高級外車マセラティは、「異国」ボローニャが『ダンス・ダンス・ダンス』に投げかけた「影」なのだ⁴⁾。

海に沈むマセラティ

『ダンス・ダンス・ダンス』のストーリーの主要な軸は、雑誌ライターである〈僕〉と、中学校の同級生にして、人気俳優・五反田亮一の友情物語である。2人が20年ぶりに再会した日、五反田は〈僕〉のアパートに運転手付きメルセデス・ベンツでやってくる。

「自分じゃこんなもの運転しない。僕自身はもっと小さい車が好きだな」

「ポルシェ？」と僕は訊いた。

「マセラティ」と彼は言った。

（『ダンス』上・226）

五反田の愛車マセラティは、その後、不吉なイメージを纏い始める。別れた妻と密会するために、人目をひく外車が不都合になった五反田。彼は、〈僕〉の国産自動車とマセラティを交換することを願い出るのだが、その際、こんな軽口を叩く。

「……気が向いたら海に放り込んでくれてもいい。本当にいいんだぜ。そうしたら次はフェラーリを買う。……」

（『ダンス』下・165）

この台詞には冗談以上の何かが含まれていたのかもしれない—と読者は後になって気づく。しばらく後にも、五反田はこう尋ねる。

「まだマセラティは海に放り込んでない？」と彼は訊いた。

「残念ながら海に行く暇がなくてね」と僕は言った。(『ダンス』下・173)

五反田に借りたマセラティで、13歳の美少女ユキとドライブした〈僕〉。第六感の鋭いユキはマセラティに不吉さを感じ取り、海岸で激しく嘔吐する。

「……あの車はなるべく乗らないようにするよ。それともいっそのこと海に沈めちゃった方がいいのかな？」

「できたら」ユキは真面目な顔で言った。(『ダンス』下・186)

五反田は、どうやら〈僕〉の昔の恋人キキを殺し、マセラティでその遺体を運んだのだ。「呪われたマセラティ」(『ダンス』下・186)は、やがてドライバーの運命を飲み込んでいく。

「友達のお楽しみで、ひとつ頼みがある」と彼は言った。「もう一杯ビールが飲みたい。でも今は立ってあそまで行く元気がない」

「いいですよ」と僕は言った。そしてカウンターに行って、またビールを二杯買った。カウンターは混んでいて、買うのに時間がかかった。グラスを両手に奥のテーブルに戻った時、彼の姿はなかった。レイン・ハットも消えていた。駐車場のマセラティもなくなっていた。やれやれと思った。そして首を振った。でもどうしようもなかった。彼は消えてしまったのだ。

40

マセラティが芝浦の海から引き上げられたのは翌日の昼過ぎだった。予想通りだったから、僕は驚かなかった。彼が消えた時から、僕にはそれが分かっていたのだ。

(『ダンス』下・280-81)

五反田は「シェーキーズ」のピッツァを最後の晩餐として、自らの命を絶つ。彼は、イタリア車・マセラティの呪いから逃げ切れず、海に沈んでいったのだ。

水中にいる五反田——物語序盤に現われるこのイメージについて言及しておかねばならない。札幌「いるかホテル」に宿泊した〈僕〉は、26階のバーでマティーニを飲みながら、古代エジプト世界を思い浮かべる。この場面は五反田の末路を予見すると共に、ある決定的な幻想世界を〈僕〉の眼前に現す契機となっているのだ。

……トレンディーなジェット・セット・エジプト人。そういう人たち用にナイル河の一部を区切るか何かして専用のプールみたいなのを作り、そこでシックな泳ぎ方を教えたのだろう。映画俳優になった僕の友達みたいな感じのいい教師がついて、偉い人たちに「はい殿下、結構でございます。ただクロールの右手をもう少しまっすぐに伸ばされた方がよろしいかと存じませぬ」なんてことをしたり顔で言っていたのだろう。 (『ダンス』上・125-26)

「ナイル河」——ネプチューンの住む地中海へと注ぎこむ川だ——の水泳コーチ・五反田。〈僕〉は、彼の魅力に失神するエジプト女性たちを思い浮かべる。この空想を発端に、〈僕〉は「いるかホテル」の異空間に迷い込んで行く。バーが閉店し、部屋に戻ろうと乗ったエレベーターの扉が開くと、そこは真っ暗闇。

「待ってたよ」とそれは言った。「ずっと待ってた。中に入りなよ」
それが誰なのか目を開けなくてもわかった。
羊男だった。 (『ダンス』上・139)

五反田、そして水。1台のマセラティによって繋がった不吉な取り合わせが、異界への扉を開くのである。

月に帰る E. T.

五反田のマセラティに負けず劣らず、〈僕〉の愛車も重要なモチーフだ。

「これいい車ね」と少しあとでユキは言った。「なんて言うの？」
「スバル」と僕は言った。「中古の古い型のスバル。わざわざ口に出して褒めてくれる人は世間にあまりいないけど」
「よくわかんないけど、乗っていて何となく親密な感じがする」
「たぶんそれはこの車が僕に愛されているからだと思う」 (『ダンス』上・203-40)

昴——地球から400光年離れたプレアデス星団——の名を冠する富士重工の自動車ブランド。そのエンブレムは、夜空に浮かぶ星々だ (図4)。



図4

五反田が海を連想させるマセラティに乗るのと対照的に、〈僕〉は宇宙空間を連想させるスバルに乗る。

〈僕〉と宇宙空間も——五反田と水のケースと同様に——やはり密接な関係にある。たとえば、作品の冒頭部、〈僕〉と恋人の間で交わされる会話をみてみよう。

「でもあなたもう三十三でしょう？」と彼女は言う。彼女は26だ。

「三十四」と僕は訂正する。「三十四歳と二ヶ月」

彼女は首を振る。そしてベッドを出て、窓のところに行き、カーテンを開ける。窓の外には高速道路が見える。道路の上には骨のように白い午前6時の月が浮かんでいる。彼女は僕のパジャマを着ている。

「月に戻りなさい、君」と彼女はその月を指し示して言う。

(『ダンス』上・18)

朝の空に浮かぶ月を見ながら、「月に戻りなさい」と言った彼女は、後日、宇宙服を着て月面を歩いている写真の絵葉書を〈僕〉によこす。「私はたぶん近いうちに地球人と結婚することになると思う」というメッセージを添えて。

〈月に帰る〉——〈僕〉を呪縛するこのモチーフは、当時の大ヒット映画によって補強されることになる。

「E. T.」をもう一度見たい、とユキが言った。

いいよ、夕食のあとで見に行こう、と僕は言った。

それから彼女は「E. T.」について話しはじめた。あなたがE. T. みたいたとよかったのに、と彼女は言った。そしてひとさし指の先で僕の額に軽く触れた。

「駄目だよ、そんなことしてもそこは治らない」と僕は言った。

(『ダンス』下・116-17)

「E. T.」——地球に取り残された宇宙人E. T. を、子供たちが匿い、無事に宇宙に帰還させる物語である。自転車かごにE. T. を乗せたエリオット少年が、月を横切る場面(図5)は有

名である。



図5

ユキによって〈僕〉がE. T. に重ね合わせられた瞬間—〈僕〉と宇宙空間が結びついた瞬間—ホノルルの町で再び、幻想世界の扉が開く。

「駄目だよ、そんなことしてもそこは治らない」と僕は言った。

ユキはくすくす笑った。

その時だった。

その時突然何かが僕を打った。頭の中でカチンという音を立てて何かが繋がった。何かが起こったのだ。でも何が起こったのかその瞬間僕には判断がつかなかった。

(『ダンス』下・117)

「その瞬間」、〈僕〉は——五反田に殺されているはずの——昔の恋人キキの姿を目にしている。彼女を追いかけてオフィス・ビルの一室に入ると、そこには再び異空間が広がっている。

僕は部屋をぐるりと歩いて回ってみた。それぞれの椅子の上には、それぞれの人骨が座っていた。骨は全部で六体あった。ひとつを除けばどれも完全な人骨で、死んでから長い時間が経っていた。どれも死んだことに気がつきもしないようにごく自然な姿勢で椅子に座っていた。

(『ダンス』下・124-25)

この部屋の白骨が象徴し予見する数々の死。「鼠、キキ、メイ、ディック・ノース、そして五反田君。全部で五つだ。残りはひとつ」(『ダンス』下・281)。

〈僕〉は、いるかホテルのフロント係、ユミヨシがその一人ではないかと心配する。

ねえユミヨシさん、僕をこれ以上一人ぼっちにしないでくれ、と僕は思った。僕には君が必

要なんだ。僕はもう一人ぼっちになりたくないんだ。君がいないと僕は遠心力で宇宙の端っこのほうに吹き飛んでいってしまいそうな気がするんだ。お願いだから僕に顔を見せて、僕を何処かにつなぎとめてほしい。現実の世界につなぎとめてほしいんだ。（『ダンス』下・307）

ユミヨシが死んだら、〈僕〉を現実の世界に繋ぎとめるものはなくなる。そうなれば〈僕〉は「宇宙の端っこのほうに吹き飛んで」しまおうすなわち、〈月に帰る〉ことになるのだ。ちょうど五反田が〈海に沈んだ〉ように。

現実世界から離脱していく〈僕〉の末路を予感させつつ、物語は最終段落を迎える。

やがて時計の針は7時を指し、夏の朝の光が窓から差し込んで、部屋の床にほんの少しだけ歪んだ四角い図形を描いた。ユミヨシさんはぐっすりと眠っていた。僕は静かに彼女の髪を上げて、耳を出し、そこにそっと唇をあてた。なんて言えばいいのかな、と僕はそのまま3分か4分くらい考えていた。いろんな言い方がある。様々な可能性があり、表現がある。上手く声が出るだろうか？ 僕のメッセージは上手く現実の空気を震わせることができるだろうか？ いくつかの文章を僕は口の中で呟いてみた。そしてその中からいちばんシンプルなものを選んだ。

「ユミヨシさん、朝だ」と僕は囁いた。

（『ダンス』下・338）

〈僕〉はユミヨシの寝顔を見つめながら、発するべき言葉を探っている。朝の太陽が部屋を照らす。現実だ。空に月はない。

マセラティと共に〈海に沈む〉五反田、そして、スバルと共に〈月に帰る〉〈僕〉——前者は実行され、後者は土壇場で回避される。長編『ダンス・ダンス・ダンス』の基本構造を支えるのは、2台の自動車——マセラティとスバル——なのだ。

アルフィエリ・マセラティは海神ネプチューンの槍を自動車のエンブレムにし、村上春樹は高級車マセラティを海に還した。噴水の上に立つネプチューン像はマッジョーレ広場に佇む二人の姿を目にしているはずだ。イタリア・ボローニャの「ネプチューンの泉」は、時代を超えて創造力の源泉となったのである。

注

- 1) 村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』（講談社 1988）
- 2) 村上春樹『遠い太鼓』（講談社 1990）

- 3) 本論に掲載した写真はすべて wikipedia 上のものである。“Fountain of Neptune, Bologna,” (図1・2) “Maserati” (図3) “Subaru” (図4) “E. T.” (図5) の項から借用した。
- 4) イタリア滞在が作品に及ぼした影響については、実際にローマに飛んだ鈴木和成の考察がある。鈴木はエッセイ集『遠い太鼓』を片手に、「ローマ三大小説」—『ノルウェイの森』・『ダンス・ダンス・ダンス』・短編集『TVピープル』—について自由に思考する。『ノルウェイの森』の装丁の赤と緑が、イタリア国旗に由来するのではないかとする発想は楽しい。『村上春樹戦記・「1Q84」のジェネシス』(彩流社 2009) 128頁